

19世紀音訳語の資料・特徴・交流

千葉謙悟*

0. 前言

- (1) 新华网伦敦12月7日电“维基揭秘”网站创始人朱利安·阿桑奇7日在伦敦一家法庭受审时说，他拒绝被引渡到瑞典。当天中午，阿桑奇在伦敦威斯敏斯特区治安法庭受审，他否认在瑞典对两名妇女进行性侵犯的指控。（人民网<http://world.people.com.cn/>）
- (2) 欧盟与俄罗斯7日在欧盟—俄罗斯峰会召开前，就俄罗斯加入世界贸易组织签署了谅解备忘录。在峰会结束后举行的新闻发布会上，欧盟委员会主席巴罗佐称这份备忘录是一个“里程碑”。…欧洲理事会主席范龙佩称赞欧盟和俄罗斯是“真正的战略伙伴”。俄罗斯总统梅德韦杰夫说，欧盟和俄罗斯的合作在许多重要领域取得了进展，双方虽然并不是在所有领域都观点一致，但双方的合作“十分实际”。（引用同上）

ここに見られる音訳語の多くは現代人からすればすでに見慣れたものと言ってよい。「美」がアメリカを指し、「英」がイギリスを指すことは第二外国語として中国語を学ぶ大学生ですら知っている。「法」「徳」なども同様である。

しかし、このような外国の情報が常に中国のメディアに乗るようになったのは比較的最近のことである。国際的な情報を伝達するにはそのためのことばが必要であった。特にその舞台となる地名、その主役となる人名は欠かすことのできない語彙である。

中国語と欧米言語が本格的な接触を果たした後時を置かずして文体の近代的な変化がおこった、というわけではない。中国における近代的文体への転換は、古い酒に新しい革袋を用いるように、伝統的文体の中へ徐々に新名詞が導入されるという形で始まったのが実情である。

ここで、見落とされがちではあるが従来の文体に導入された「新名詞」は決していわゆる意訳語だけではないということには注意すべきであろう。国外情報の伝達は人名地名を含めた音訳語なくしては成立しない。そしてそのような音訳語の研究は目下きわめて手薄である。一般

* 中央大学経済学部准教授

に、新しい翻訳語は割注を付される形で徐々に語彙化の手続きを経、最終的に定着する。¹⁾ 中国国外の人名地名についていえば、この過程において一つの対象に対しさまざまな基礎方言に基づく複数の語形が提案された。これらは選択と淘汰を経て現代使われる形に収斂していくわけであるが、ここではそのメカニズムについて論じない。いずれにせよ、本稿が検討しようとするのはそうした19世紀音訳語の全体的な状況である。

音訳語はさまざまな媒体に記録された。対訳辞書、外国語のテキスト、新聞雑誌などといった19世紀に出現した新しいメディアにも登場した。本稿では19世紀の中国語文献にみられる音訳語についてメディアの類型ごとにおおまかな分類を行い、かつ主要資料を紹介する。併せてそこに見られる音訳語の傾向について分析したい。なお本稿では音訳語の対象を地名人名の語形とする。

1. 音訳語の特徴と資料の類型

本節では音訳語資料として用いられる諸文献を便宜上以下の5種類に分け、それぞれについて主要資料を紹介する。5種類とは(1)対訳辞書類、(2)会話教本類、(3)史地課本類、(4)報刊雑誌類、(5)域外遊記類である。本来であればこれに伝道文書や漢訳聖書といったキリスト教関連の文書をも加えるべきであるが、紙幅の関係上今回は扱わない。同時にそれぞれの文献に見える音訳語の特徴についても簡単な検討を加えたい。

1.1. 対訳辞書類

1.1.1. 主要な対訳辞書

対訳辞書類は主として来華外国人によって編纂され、その種類も多い。英華辞典のみならずフランス語やロシア語など、主要なヨーロッパ諸語による対訳辞書は長い歴史を持つ。

19世紀の英華辞典はモリソン (R. Morrison) の『華英字典』(1822) に始まる。次いでウィリアムズ (S. Wells Williams) 『英華韻府歴階』(1844)、メドハースト (W. H. Medhurst) 『英華字典』(1847-48)、ロプシャイト (W. Lobscheid) 『英華字典』(1866-69)、ドリトル (J. Doolittle) 『英華萃林韻府』(1872)、ウィリアムズ 『漢英韻府』(1874)、ジャイルズ (H. A. Giles) *A Chinese-English Dictionary* (1892)、ボウラー (F. W. Baller) 『漢英分解字典』(1900) など枚挙に暇ない。来華外国人による辞書編纂の流れはマティーア (A. H. Mateer) *New Terms for New Ideas* (1913)、ヘーメリンク (K. Hemeling) *English-Chinese Dictionary of the standard Chinese spoken language* (1916) のように20世紀に入ってからも続くが、それは本稿による検討の範囲外である。

1) 語彙化 (詞彙化) の概念と事例については沈国威 (2010) 参照。

19世紀後半には中国人による英華字典も現れる。鄺其照『華英字典集成』（1868）、譚達軒『華英字典彙集』（1875）、梁述之『英華字典』（1878）、黄少瓊『字典彙選集成』（1895）、顔惠慶『商務館華英字典』（1902）などである。このうち譚達軒、梁述之、黄少瓊の字典はそれまでの来華宣教師による諸字典を集成したものであるから、オリジナリティの面からいえば鄺其照の字典が重要である。²⁾ 中国人による対訳辞書編纂の系譜は20世紀以降顔惠慶『英華大辞典』（1908）、黄士復等編『総合英漢大辞典』（1927）などに連なる。

上述の対訳辞書は幕末の日本に舶載され和刻本が出版されたものも少なくない。これらは幕末から明治初期の日本にあって翻訳語の来源として大きな影響力を発揮した。いわゆる日本製の翻訳語と思われていてもその来源をたどれば舶載・翻刻された対訳辞書に行きつくという例は豊富である。和刻本の出された対訳辞書の例を挙げれば、ウィリアムズ『英華韻府階階』に対する鮎沢信大『英華字彙』（1869）、メドハースト『英華字典』に対する永峰秀樹『英華字典』（1881）、ロブシャイト『英華字典』に対する中村敬字『英華和訳辞典』（1876）と井上哲次郎『訂増英華字典』（1883-84）、ドリトル『英華萃林韻府』に対する矢田堀鴻『英華学芸詞林』（1880）などがある。

英語以外のヨーロッパ言語との対訳辞書に目を向ければ、フランス語にはド・ギーニュ（De Guigne）『漢字西訳』（1813）、佚名『漢字撮要』（1845）、ペルネー（Perney）『西語訳漢入門』（1869）、クヴルー（Couvereur）*Dictionnaire français-chinois*（1890）、ドベス（Debesse）『法漢字彙簡編』（1900）などがある。ロシア語ではイサイア（Исаия）*Русско-Китайский Словарь*（1867）、ヴァシリエフ（Васильев）*Графическая Система Китайских Иероглифов*（1867）、ポポフ（Попов）『俄華合璧増補字彙』（1879）、ペシュロフ（Пешуров）『漢俄字彙』（1887）、カファーロフ（Кафаров）『漢俄合璧韻編』（1888）を挙げることができる。ポルトガル語にはゴンサルヴェス（J. A. Gonçalves）『洋漢合字彙』（1831）、ラテン語にはゴンサルヴェス『辣丁中華合字典』（1839）、ショット（Schott）*Vocabularium Sinicum*（1844）、佚名*Vocabularium Sinico-Latinum juxta* 五方元音（ca.1878）、クヴルー*Dictionarium Sinicum & Latinum*（1892）が挙げられよう。これらの非英語対訳辞書はまだ十分に利用されているとは言い難く、今後の研究の深化に俟つところが大きい。対訳辞書類および文法書の詳細な目録については塩山・石崎・千葉（2010）を参照されたい。

以上は官話を収録対象とした辞書に限られる。中国語諸方言との対訳辞書もおびたしい数が出版されているが紙幅の関係上ここでは触れない。詳しくは遠藤・竹越（2010）所収の各種文献目録を参照。

なお19世紀の後半には中国で世界地名辞典も出版されるようになる。これについては後述。

2) 鄺其照の生平とその著作については宮田（2010）、高田（2009）参照。

1.1.2. 規範化への志向

辞書は原語と目標言語との間に語の対一の対応関係を指示するためのツールである。従って辞書の編纂はその対応関係を規範化する志向と切り離すことはできない。ここでは対訳辞書類に見える音訳語に与えられた規範化の現れとして3点指摘しておく。

第一は音訳語一覧表の存在である。対訳辞書にはしばしば巻末付録を持つものがある。付録に含まれるものは中西暦対照表、度量衡換算表、手紙文例集などが一般的であるが、中には主要な音訳語一覧表を含むものもあった。これはその辞書が音訳語を規範化する意図を示したものと捉えることができよう。

中国語における音訳語が中国語学習者や辞書編纂者にとって頭の痛い問題であったことは想像に難くない。音訳語形の多様性は、対訳辞書が原語と訳語の対応関係を樹立しようとする際大きな障害となっていた。対訳辞書では音訳語を可能な限り廃し意識語を採用するような対応を採る流れもみられたが、音訳語そのものの規範化を図る動きも存在していた。³⁾ 本稿では一例としてオーバザック (L. Aubazac) 『法粵字典』(1902) をとりあげたい。これは香港で出版されたフランス語と粵語の対訳辞書である。『法粵字典』はこれまで取り上げられることがほとんどなく、19世紀という本稿の検討範囲からもやや外れるが、本書が持つ特徴は対訳辞書における規範化の試みを端的に示すものである。この書の巻末付録には地名表があり、主要な国名や主要都市名が一覧になっている。Aubazac (1902:ix-xi) よりいくつか例を示すと以下。ローマ字標音に付される声調符号は省略。

(3)Gènes (ジェノヴァ)	熱納 yit náp
Jamaïque (ジャマイカ)	牙買加 ngá mái ká
Rio-de-Janeiro (リオデジャネイロ)	里牙熱内廬 li ngá yit noi ló
Pondichéry (ボンディシェリ)	本地治理 poun ti tchi li
Russie (ロシア)	俄羅斯 ngo lo sz
Turquie (トルコ)	土耳其 t'ó yi k'i

粵語の辞書でありながら、音訳語の基礎方言が必ずしも粵語とはいえないことが読み取れるだろう。ジェノヴァ、ジャマイカ、リオデジャネイロでは「熱」「牙」の粵語音が原語音との一致性において他方言よりも劣る。「熱」「牙」はそれぞれ粵語でおおむね[ji][ŋa]、官話音で[zɿ][ia]。⁴⁾

3) 1890年の来華プロテスタント宣教師連合会議におけるFryer (1890) を参照。フライヤーは翻訳語統一運動を清朝政府に求めるのではなく宣教師たちが自ら起こすよう提案した。フライヤーはその中で音訳語を可能な限り使わないこと、やむを得ず用いる際は官話を基礎方言として用いることを主張している。

4) Jamaica に対する「牙」という語形は今後詳細な検討に値しよう。スペイン領であった当初はスペイン

ロシアやトルコの語形はかなり以前から安定しており19世紀中には(3)に見える語形に定まっている。『法粵字典』もこの語形を沿用しているが、粵語で発音すると原語音との類似性は他方言（特に官話）による読音よりも下がる。

また『法粵字典』がその名の通りフランス語と粵語との対訳辞書であるにも拘わらず、地名の読みが英語的であることも注意される。例えばボンディシエリはフランスのインドにおける拠点都市の名であり、原綴にみえるchéはフランス語であれば摩擦音[je]と読まれるべきところである。しかし(3)では英語の破擦音[tʃe]に対応して「治」が用いられていることが注目されよう。ちなみに「治」は閩語を除き破擦音声母を持つ。⁵⁾

以上の諸点から、粵語を対象とした辞書であっても規範を示すためであれば音訳語基礎音系に必ずしも粵方言は選択されないということが分かる。すなわち官話音を基礎音系とする音訳語、あるいは英語を原語とする音訳語が規範として受け入れられ、広められようとしていたことを示す。このような措置は方言音や原語の違いを超えた音訳語形の安定化に資したであろう。

第二に挙げられるのは訳音表の制定である。訳音表を作成することは即ち原語のアルファベット或いは音節に対し対応する漢字を事前に決めておくことである。この原則が守られれば音訳語は一定の字数の漢字の組み合わせに収まり、規則的に語形を導き出したり原語音あるいは原綴を推定したりすることが容易になる。⁶⁾

この種の試みが初めて具体的に示されたのは管見の限りながら『英華萃林韻府』においてである。『英華萃林韻府』は3部構成を取り、第一部が対訳辞書、第二部と第三部が術語集という体裁を採る。その第三部に英語音節と音訳漢字との対照表が掲載されているのである。執筆担当者はH. Ewer。イーワーは表の前言として以下のように述べる。（強調は千葉による）

(4) I cannot hope that this list will obtain the approval of all interested in the subject, but have sought to meet the ideas of many by accepting the characters used by the Translators of the Bible, limiting the use of each character as the equivalent of one

語で[hamaika]と呼ばれていたはずであり、[ʒameika]という英語音を考慮しても「牙」の字音とは対応しないように見える。なお「牙」が声門摩擦音や歯茎摩擦音（または破擦音）を持つ主要方言はみあたらず、どの地点でも口蓋摩擦音か軟口蓋鼻音しかもたないようである。（北京大学中国语言文学系语言学教研室（2003:13））。ヨーロッパの主要言語でjaを軟口蓋鼻音に読むものは存在しないから、jaを[ja]のごとく読むラテン語やドイツ語が「牙買加」なる語形の原語として想定されよう。ただしラテン語は近代ではその国の正書法に近い読みが採用されている場合があるため、jaを常に[ja]と読むとは限らない。

5) 北京大学中国语言文学系语言学教研室（2003:64）。

6) ただし訳音表のみに頼る場合、英語では綴りと発音の不对応が問題となった。そのため英語を音訳するときには綴りに従って機械的に音訳する（むしろ転写する）べきか、それとも発音に従って訳音表に例外を認めるべきかが議論となった。

syllable only. The use of the list will be to spell out the names of men and places, &c. by syllables. The result will be probably not so curious as the present method, which in the majority of cases so masks name, that its recognition is difficult; but uniformity will be introduced where there is at present confusion, and one syllable value being set upon each character, translation and retranslation will be both simple and certain. Should this system meet approval, still it may be objected to on account of uprising work already done. But the names hitherto translated are few compared with those yet to come; and if it is acknowledged that confusion exists in what has already been accomplished. The following the same systemless track can only multiply confusion with every accession of Euro-Sinensian Literature. Doolittle (1872:Part III 408)

彼の対照表は5頁に及ぶ。いまそのうちのいくつかを例示すれば以下の通り。なお斜体は音訳漢字の基礎方言が粵語であることを示す。それ以外は官話が基礎方言である。アルファベットのゴシック体はそれがウィリアムズのローマ字標音と表記法が異なることを示す。

(5)A 亞, *ab a* 押, *ac ak* 握, *ach ak* 厄, *ad ak* 鉅, æ 伊, *af* 亞付, *ag ak* 阨, *ah* 蝦, *ai* 孩, *ok hak* 克, *al* 厥, *am* 唵, *an* 安, *ang* 昂, *ao* 傲, *ap* 鴨, *ar* 呀, *as* 亞士, *at* 壓, *au* 咭, *auck ok* 壘, *ax aksz* 克仕, *az* 亞私, *aw* 拗

B 比, *ba* 巴, *baa* 貳, *bac pak* 北, *bach* 把, *bad pat* 捌, *bag pat* 八, *bah* 吧, *bai* 罷, *baï* 排, *bal* 包, *bald* 包低, *bam* 髒, *ban* 斑, *bar* 弭, *bas* 巴士, *bat* 樺, *be* 比, *beau* 玻, … (後略)

Doolittle (1872:Part III 408)

イーワウの試みは訳音表の最初期に属するものとして注目に値しよう。彼は別の場所で、聖書中の音訳語に統一性を与える目的からこのリストを作成したこと、実践の結果公表に耐えるものであると判断したことを述べている。⁷⁾

『英華萃林韻府』所載の各種術語集は来華宣教師たちが分担執筆して成っており、来華宣教師による1870年ごろまでの中国語研究の集大成といってよい。このことから『英華萃林韻府』は対訳辞書類の中でも規範への志向を最も明確に示すものである。

19世紀における訳音表作成は来華外国人によって主導されていたが、20世紀に入ってから中国人によるものが主流となる。その状況を簡単に説明しておきたい。ここでは陳独秀「西文訳音私議」(『新青年』2-4、1916年)を見よう。陳独秀は「単独字母訳音」と「拵合字母訳音」という二種類の一覧を掲出する。前者はアルファベット単体に対応する。後者は音節単位で音

7) Doolittle (1872:Part III 408)

訳漢字を示す。具体例は以下。

(6)A 亜 B 白 C 克斯 D 德 E 厄 F 夫 G 格…

Ba 巴 Da 達 Fa 法 Ga 加 Ha 哈 Ja 惹 Ka 卡 La 拉…

Be 貝 Bi 比 Bi 拜 Bo 波… Bin 賓 Bon 奔

陳独秀 (1916:399)

「単独字母訳音」は、母音であれば単独で発音される場合、子音であれば複声母のうち母音と結合しない部分の発音に宛てることを想定しているようである。例えばpostのsとt。Cについて「克」と「斯」の二字があるのは、前者ならば例えばclimbのc、後者ならばsliceのceに宛てることを想定しているようである。陳独秀の案は英語、ドイツ語、フランス語に対応できるよう作成されており、例えばIには「易」「哀」の二字が示されている。

訳音表の末尾にある説明には原語の母音に宛てるべき中国語中古音の韻、原語の子音に宛てるべき中国語中古音の声母が指示されている。

(7)法徳二語讀E均入灰韻，今從之。英語讀I，有“易”、“哀”二音。此即中土古韻之哈同部之理。今從英語以短音i（易）屬之部，以長音i（哀）屬哈部。 陳独秀 (1916:401)

(8)FVW三聲合華音非奉微三母。同屬輕唇而皆有分別舊譯V聲，不輕亂於F，即重亂於W。今後譯F聲必用非母之字，V聲必用奉母之字，W聲必用微母之字，始釐然有當也。

陳独秀 (1916:402)

以後いくつかの訳音表が提案され音訳語形を標準化する試みが散見する。例えば何崧齡『標準漢訳外国人名地名表』（1924）には「西文訳音総分名表」が付録している。中華人民共和国が成立してからは訳音統一工作が進展し、現在主要な言語については慣用による例外を除き音節と対音漢字との対応がほぼ確立している。⁸⁾

規範化への第三の試みは音訳語辞典の編纂である。第一の音訳語一覧表と重なる部分があることは確かだが、音訳語辞典が単独で出版されることの意義を重視して分立した。

音訳語辞典史においてSmithの*A Vocabulary of Proper Names* (1870) は初期の試みとして重要な位置にある。管見の限りながらこれが音訳地名を体系的に収集した初めての辞典である

8) 各言語と音訳漢字との対応関係を定めるため、1960年に『外国地名手冊』（地図出版社）、1976年『世界地名訳名手冊』（新華社、内部用）、1983年に中国地名委員会『外国地名訳名手冊』（商務印書館）、1993年『外国地名訳名手冊（中型本）』などが相次いで出版された。法規的にも1999年9月1日施行の国家標準「外国地名漢字訳写導則（GB/T 17693-1999）」が定められている。

ようだ。⁹⁾ 例えばロシアやフランスの国名については以下のように解説する。

(9) 俄羅斯 *Ngo-ko (sic) -si*, the usual translation of the word into Chinese. This is perhaps a transference of the Mongol word *Ooroos*, or *Oros* into Chinese, that being the name for Russia, first known to the Chinese during the early part of the Ming dynasty. The intervention of the *Kara Kitai*, exterminated by the Mongols, after a long rule over the north of China, had prevented any knowledge of China Proper. The Chinese are however still called *Kitai*, by the Russians, after this northern race. Smith (1870:35)

(10) 大法国 *Ta Fah Kwoh*, France. The Chinese believe that the French were Buddhists until converted to the Romanish creed. Just as the *Fah* (Buddha) of the original name, *Fah-lang-si*, embodied this idea, so the *Fah* (Dharma) of the term adopted by the French themselves, confirms this idea. The resemblance between Romanist and Buddhist practices must also have suggested it. Smith (1870:50)

この後20世紀に入るまでしばらく音訳語辞典が編纂されることはないようである。20世紀初頭の中国で出版されたこの種の辞典としては坂本健一、新学会社訳『世界人名地名人名辞典』(1904)が挙げられよう。これは日本で出版された同名の辞典の中国語版である。日清戦争後における日本語導入ブームは第二節で詳述するとおり音訳語にも波及していたことが分かる。

また、後に述べる史地課本類に帰することも可能ながら中国人による世界地名の集成として以下の二書を挙げておく。張士瀛『地球韻言』四卷(1899)と杜宗預『瀛寰訳音異名記』十卷(1904)である。前者は世界地理を四言の韻文で簡潔に解説した教科書である。事例は以下の通り。下線と語注は千葉による。以下同。

(11) 日耳曼 (German) 南 國曰瑞士 (Switzerland) 積雪皚然 明漪湖水

阿耳魄士 (Alps) 峰巒起伏 鐵路徑行 出入山腹

萬景變幻 明滅各殊 忽收忽展 如覽畫圖

郵政聯絡 於百爾尼 (Berne) 書院良法 女士習醫

不立王侯 鄉官理事 與德 (German) 交權 方興國勢

張士瀛 (1899: 卷二瑞士第十七)

(12) 玻利 (Peru) 東南 是曰智利 (Chile) 背山作都 散堤牙 (Santiago) 里

燄峰時震 產金銀銅 民難業礦 亦重農功

與祕魯 (Peru) 閔 奪其鐵艦 速率較優 可資攷鑑

張士瀛 (1899: 卷四智利第十七)

9) ただしスミスの辞典は外国地名のみならず中国国内の地名や官名なども含む。欧米の地名はそれらに比べると少数である。

老舎も幼少の頃『地球韻言』で世界地理を学んだことが知られている。また『瀛寰訳音異名記』は世界の都市、山河などを見出しに掲げ、その各種文献における異表記を列挙した上で当該の土地について解説を加える地名辞典である。詳細については千葉（2010:119-129）参照。一例は以下。句読は千葉による。以下同。

(13) 澳大利亞（Australia）

『志略』又作新荷蘭。英人稱新金山。『括地略』作奧旋尼加。『萬國地志』作奧西尼亞。『泰西新史』作澳斯鐵里亞。『地理問答』作奧斯達拉西亞。『五太洲志』作濠斯太刺利西亞。『世界地學』作篋拉涅西阿（Melanesia），即美拉奈西。合巴布亞（Papua）而言。在太平洋西南。印度洋東。亦曰南亞細亞（Asia）為第一海島。英屬地。分七省。官由英選。土人甚稀。
杜宗預（1904：卷七澳洲城池所在）

(14) 密世幹（Michigan）湖

『志略』又作密執安。『地理問答』作米西干。『世界地志』作密西岡。『地學』作密西甘。『外國地理』作詩加顏，亦作昧師顏。『萬國地志』稱密且更。有運河與密士失必（Mississippi）相通。值合眾國密執安（Michigan）西，維士孔新（Wisconsin）東。
杜宗預（1904：卷十一坎拿大山水海地所在）

この二つの文献はともに湖北で出版されている点が興味深い。

20世紀に入ると上述した何崧齡等編『標準漢訳外国人名地名表』（1924、商務印書館）が出る。以後、訳音表と地名辞典はセットになって音訳語形の統一に貢献することになる。

1.2. 会話教本類

1.2.1. 主要な会話教本

まずは英語に関する文献について述べる。外国人による英語教本としてはマーシュマン（J. Marshman）『中国言法』（1814）、モリソンの *Chinese Assistant* および『英吉利文話之凡例』（1823）、Shaou Tih *The English and Chinese Studies Assistant*（1826）、トーム（R. Thom）『華英通用雑話』（1843）、マガウワン（J. Macgowan）『英語正音』（1862）、『英字源流』（1863）などがある。

文法書としてはマーシュマン『中国言法』、モリソン『通用漢言之法』（1815）、ギュッツラフ（K. F. A. Gützlaff）*Notices on Chinese Grammar*（1842）、クロフォード（Crawford）『文学書官話』（1869）、ボールー（Baller）*A Madarin Primer*（1891）が挙げられる。『文学書官話』は日本に伝わって大槻文彦『支那文典』（1877）、金谷昭『大清文典』（1877）、村上秀吉『支那

文典』(1893)という翻刻を生んだ。¹⁰⁾

中国人による英語テキストとしては唐廷枢『華英音釈』(1858以前)、改訂版『英語集全』(1862)、曹驥『英字入門』(1874)、楊勳『英字指南』(1879)とその増訂本『増広英字指南(Method for Learning English)』(1901-02)、鄺其照『英語彙腋初集』(1885)と『英学初階』(1885)などがある。これらは最終的に商務印書館の最初の出版物『華英初階』(1898)と『華英進階』に発展していく。

同じく中国人による英語文法書には汪芝房『英文挙隅』(1879)、張德彝『英文話規』(1895成書、1909出版)がある。

外国人による中国語会話書にはモリソン *Dialogues and Detached Sentences* (1816)、トーム *The Chinese Speaker* (1846)、ウェイド (J. F. Wade) 『語言自邇集』(1867)、ジャイルズ *Chinese without a teacher* (1872)、マティアー (C. Mateer) 『官話類編』(1892)などがある。

日本人による中国語教科書としては呉啓太・鄭永邦『官話指南』(ca. 1881)が代表的である。『官話指南』は英語、フランス語、ロシア語、イタリア語などさまざまな言語に訳されて広く使われた。

中国人による中国語文法書としては畢華珍『衍緒草堂筆記』(1855)¹¹⁾、馬建忠『馬氏文通』(1898)がある。

方言テキストも豊富に残るが紙幅の関係上ここでは贅言しない。遠藤・竹越主編(2010)を参照。

外国人によって編まれた中国語教本は、外国人が中国語を学ぶのと同時に中国人が外国語を学ぶこともできるよう配慮して編纂されていた。また宣教師を中心とする一部の外国人はピジンを排斥して「正しい」英語を中国人に広めるべきだと考えていたことも指摘しておく。¹²⁾

しかし会話教本類において一連のピジン英語教科書は無視できない分量を誇っている。ピジンのテキストはアヘン戦争以前から流通しており、音訳語資料として主要なものとしてはいずれも佚名の『紅毛売買通用鬼話』(栄徳堂)、『紅毛番話貿易須知』(富桂堂、以文堂)、『紅毛番話』(ca.1833)、『紅毛通用番話』(成徳堂、璧経堂)、*Chinese and English Vocabulary*、『夷音輯要』がある。なおこれら8種の資料は内田・沈(2010)に復刻収録されており資料的価値が高い。他にも子卿『華英通語』(1855)『華英通語集全』(1879)、和刻本に福沢諭吉『増訂華英通語』(1860)が一連の文献として存在する。加えて張宝楚等『英語註解』(1860)や『英語不求人』など、19世紀半ば以降にもピジン英語のテキストは出版され続けた。¹³⁾

10) 内田2010:85-111。

11) 畢華珍の生涯と事績については千葉(2006)参照。

12) 英語教科書にこめられたピジン撲滅への志向については千葉(2009b)参照。

13) 『英語註解』は「正統な」英語ではなく開港地で使われていたピジン英語のテキストであるためここに入れた。

ピジン英語に関してはテキスト以外にもモリソンの息子J. R. モリソンの *The Chinese Commercial Guide* (1834) に “jargon spoken at Canton” なるリストが載せられている。19世紀の欧米人による中国旅行記の類にもピジンの単語や文例を挙げるものがある。

1.2.2. 基礎音系の不統一

会話教本類では発音を正確に示すため慣用とは異なる表音が用いられることがしばしばである。例えば、外国国名では完全な音訳語あるいは「音訳語形中の一字+“國”」の語形が一般的であるが、会話教本類では外国語習得という目的からあえてそれとは違った音訳語が与えられているのである。一例を挙げれば『英話註解』より以下のようになる。右が見出し語、中央が英語、右が音訳語。

(15) 中國	China	采納	大英	England	恩齋藍脫
英國京城	London	倫敦	花旗	America	美立根
合眾	United States	尤乃脫司推之	佛蘭西	France	勿藍司
俄羅斯	Russian	而路興	大丹	Danish	淡熱須
西洋	Portugal	砲丟戩而	大西洋	Europe	歐路潑
小西洋	India	英弟也	荷蘭	Dutch	踏痴
黃旗	Denmark	圃買克	印度	Indian	英笛也
大呂宋	Spain	司拜行	小呂宋	Manila	捫你拉
日本	Japan	著本	高麗	Corea	高力也
琉球	Lewkew, Loochu	路祖, 琉球	斯巴尼亞	Spanish	司板逆須
孟加拉	Bengal	朋戩而	孟美	Bombay	傍倍
買特拉司	Madras	買特拉司	回回	Turkey	偷啟
亞非利加	Africa	愛勿力蛤	羅馬	Rome	而羅姆
緬甸	Burman	剖蠻吳	加拉巴	Batavia	倍脫物也
廣東	Canton	鉛當	香港	Hongkong	夯江

張寶楚等（1860: 各國鎮頭門）

ここから、左側の語形が一般には通用しているにもかかわらずピジン英語の発音としては右側の音訳語の読音が指示されていることが分かる。「大西洋」「黃旗」といった、音訳ではない地名にも当然ながら音訳語形が記されている。

会話教本類は外国語学習が第一の目的であるから、発音習得のため与えられる音訳語はその基礎音系が当該課本の使用者の方言によって規定される。例えば(13)においてはDanishが「淡熱須」となっているが、原語[demɪʃ]の[nɪ]に対して「熱」を用いているのは、後述するように

『英話註解』が呉語を音訳語の基礎方言としていたからであろう。「熱」はおそらく[jie?]（調値略）のような発音であったと考えられる。「熱」の粵語音と官話音は(3)においてすでに述べた。

逆に言えば、これらの資料は当時の方言音を知る手がかりの一つともなりうるし、方言音の再構のために用いられた資料も存在する。しかしいずれにせよ音訳語の基礎音系が全国的に通用する方言ではない場合、それは当該会話教本の流通範囲を自ずと制限することになった。粵語や呉語で書かれた教本は、それらを解しない地域にあつては正確な読音を期しようがなかったのである。

例えば唐廷枢『英語集全』はその編纂動機の一つに、呉語話者が英語を学ぼうにも呉語による標音を与える教材が欠けていたことを挙げる。アヘン戦争直後の英語教本はまだ粵語を音訳語の基礎方言としているものがほとんどであった。

(16)茲奉飭諭旨,准予各口通商,中外交易,自必更加蕃盛。但言語不通,雖善於經營者,未免齟齬。吾邑籍於此者十居七八。自宜互相習學,然亟欲習學英話者,亦苦無門可入耳。向有『英話』一書,所註均係廣音,好學者仍無把握。今余會商寶楚張君、對山馮君、紫芳尹君、久也鄭君、敘五姜君等彙資,著『英話註解』一書,註以勾章鄉音。分門別類,使初學者便於記誦。其中細微曲折,雖不能悉載而英商之方言已具大略。是書也或亦吾邑懋遷之一助云爾。

張寶楚等 (1860:馮澤夫序)

これによれば『英話註解』以前に『英話』なる粵語で注音した教本が存在したものの、呉語圏の寧波では学びようがなく、そこで張寶楚と寧波出身の5人が新たに呉語による注音を付したという経緯がうかがえる。

このように、会話教本類では標音の基礎方言が何であることを明示する例がしばしば見られる。もう一例を挙げるとトーム『華英通用雜話』では「正音」で発音することを指示していた。なおトームにとって「正音」とは明らかに南京ではなく北京を中心とする官話音のことである。内田 (2002:321-333) 参照。

(17)此書皆以正音所造,無論外省外府,凡欲研求此書者,務要從正音讀之,方得其要旨。

羅伯聃 (1843:讀誦英華通用凡例)

こうした状況下、会話教本類では各種方言による音訳語が並立し音訳語形の多様化が進んだ。

一方で、特に粵語を標音の基礎方言とするピジン教本において顕著であるが、ピジン英語の標音が定型化して後世に受け継がれているように見える状況がある。例えばアルファベットや数字は粵語を基礎方言とするどの文献でもほぼ同じ標音を用いているのである。比較すれば以

下の通り。

表 1

	鬼話	須知	番話	C & E	増訂
1 one	温	温	温	温	温
2 two	都	都	都	都	都
3 three	地理	地理	地理	地里	地厘 ¹⁴⁾
4 four	科	科	科	科	科
5 five	輝	輝	輝	輝	輝乎
6 six	昔士	昔士	昔士	昔士	昔時
7 seven	心	心	心	心	些焚
8 eight	噎	噎	噎	呵	— ¹⁵⁾
9 nine	坭	坭	坭	呢	乃因
10 ten	顛	顛	顛	顛	顛

※表中の文献略称：鬼話＝『紅毛売買通用鬼話』、須知＝『紅毛番話貿易須知』、番話＝『紅毛通用番話』 C & E = *Chinese and English Vocabulary*、増訂＝『増訂華英通語』

従って音韻史の資料として教本類の文献を利用しようとするのであれば各文献の標音の継承関係にも留意する必要がある。つまり当該文献の標音が当時の言語音を直接反映したのではなく、前代の表記を継承したに過ぎない場合も考えられるのである。¹⁶⁾

1.3. 史地課本類

1.3.1. 主要な史地課本

便宜上歴史書と地理書に分かつが、一書で双方の性格を兼ねているものもある。

まずは歴史書について紹介する。外国人による漢文著作としてはメドハースト『東西史記和合』(1829)、モリソン『外国史略』(1830年代)、ミュアヘッド(W. Muirhead)『大英国志』(1856)、アレン(Y. J. Allen)『四裔編年表』(1874)、リチャード(T. Richard)『泰西新史攬要』(1895)がある。

14) 「厘」には本来は竹冠がある。

15) 9の標音「乃因」と同じになっているため省略。

16) 会話教本類の注音は実用に耐えなければならなかったはずであるから、長期にわたって同じ標音が受け継がれているのは当該の標音が安定して対音たりえていたためであると解釈できる。したがって音形の文献間における継承は基礎方言の音系が安定していたことを示すことになろう。

日本人による世界史関連文献の漢訳としては河野通之『米利堅志』（1873）、岡本監輔『万国史記』（漢訳1880。原著1776）がある。

中国人による歴史書には王韜『普法戦紀』（1873）と『重訂法国志略』（1890）¹⁷を挙げることができる。

世界地理に関する記述で最初期のものはメドハースト『西遊地理便童略伝』（1810年代）に求められる。その後ブリッジマン『美理哥合省国志略』（1838）、『亜墨里格合衆国志略』（1844）、『聯邦志略』（1861序）という一連の文献、ギュッツラフ『大英国統志』（1834）、『万国地理全図集』（1838）および『貿易通志』（1840）、マルケス（Marquez）『新釈地理備考』（1847）、ウェイ（R. Q. Way）『地球図説』（1848）と『地球説略』（1856）、ミュアヘッド『地理全志』（1853）等が現れる。

中国人の著作には林則徐『四洲志』（1841）、魏源『海国図志』（1844）、徐継畚『瀛環志略』（1848）等がある。このうち『海国図志』はそれまでの世界地理に関する著作を集成し長く海外情報の出典として重視された。また『瀛環志略』は後代の外交使節たちが基本文献として携えていったほど歓迎された。この後、中国人が自ら世界地理文献を編纂するようになるのは日清戦争後のこととなる。

中国人による世界地理関係の著述では『瀛環志略』の音訳語が多く引き継がれていることが注目される。例えば前節に触れた『瀛寰訳音異名記』と比較すると『瀛環志略』に記載のある音訳語との一致率は比較的高い。例えば『瀛環志略』と『瀛寰訳音異名記』見出し地名との一致率を見ると以下の通り。千葉（2010:122-123）より作成。

表 2

国名	一致する語形/全語形	一致率 (%)
フランス	79/93	84.9
アメリカ	30/92	32.6
ブラジル	19/26	73.1

このうち、アメリカの『瀛寰訳音異名記』における92種の地名のうち26例は『瀛環志略』に記載がないのでこれを除外すれば一致率は45.4%にまで上昇する。またブラジルについても6例は『瀛環志略』に記載がないので、修正後の一致率は95%となり、ほとんど『瀛環志略』の語形を踏襲していることが分かる。

17) この書は西洋人による西学書以外に岡本監輔『万国史記』や高橋二郎訳述、岡千仞制定『法蘭西志』（1878）を参照している。

1.3.2. 語彙化の試み

史地課本類はその性格上音訳語が最も豊富に現れる。そのほとんどは地名人名の類や官職名などであるが、それらを中国語に定着させるための試みは注目すべきであろう。ここではミアヘッド『大英国志』（1856）を見たい。『大英国志』は19世紀までのイギリス通史である。中国の伝統的な紀伝体に近い体裁を採用して王ごとに章節を区切る。¹⁸⁾ 文体の例を二つ挙げれば以下の通り。

(18) 哈羅德 (Harold) 既死, 威廉 (William) 為持重計, 自哈斯頂斯 (Hastings) 至多弗爾 (Dover) 沿海克諸卡壘, 將入國門, 而倫敦 (London) 部長, 及士商百姓, 共議立亞梯令 (Ætheling) 為王以拒之。 威廉 營於郊外, 遣兵合圍, 四出抄掠, 斷城中糧餉。

慕維廉 (1856: 卷之三)

(19) 都鐸爾 (Tudor) 朝第一王顯理 (Henry) 弟七, 生於威爾士 (Wales), 當一千四百五十六年, 實明英宗復辟之元年也。舉兵時年三十, 出亡在外者十五年, 雷塞斯德 (Leicester) 之戰既勝, 旋師倫敦 (London), 欲滅舊朝。王子北藍大日奈 (Plantagenet) 易義德瓦 (Edward) 者, 格拉林斯克 (Duke of Clarence) 子, 義德 弟四 (Edward IV) 力查 弟三 (Richard III) 之從子也。為瓦威克亞爾 (Earl of Warwick), 年僅十五, 顯理 執之, 囚於倫敦壘 (tower of London)

慕維廉 (1856: 卷之五)

(18)はノルマンディー公ギョームがイングランド王ハロルドをヘイスティングスの戦いで破ってロンドンを攻略する場面、(19)はヘンリー7世がウォリック伯エドワード・プラントジネットをロンドン塔に幽閉する場面である。地名人名のみならず爵位を含めた多くの音訳語が現れていることが見て取れよう。

一般に、双方の言語に通じるほど原語の語義を正確に目標言語へ移植することに困難を覚えるものである。音訳語をあえて用いるという選択はそうした認識を踏まえた苦渋の決断であることも多い。従って音訳語に割注が見られるのはそうした認識の反映といってもよいであろう。試みに以下の文章を参照。括弧内の漢文は割注。英語原綴は千葉による。

(20) 一、史記皆以國政為綱領, 天下萬國, 政分三等。禮樂征伐, 自王者出, 法令政刑, 治賤不治貴, 有國者西語曰恩伯臘 (emperor. 譯即中國皇帝之號)。如中國、俄羅斯 (Russia) 及今法蘭西 (France) 等國是也。以王者與民所選擇之人共為政, 君民皆受治于法律之下, 有國者西語曰京 (king. 譯即王。與皇帝有別)。泰西諸國間有之, 而則歷代相承, 俱從此號。又有無帝無

18) ただシクロムウェルについては「紀」ではなく「記」として立てる。「高門窟 (Commonwealth) 時英國無王, 其時事為別記, 一則格朗空 (Cromwell), 有軍國大權, 亦未踐王位, 故不曰紀, 而曰記, 史家變例, 義各有當耳」慕維廉 (1856: 凡例 4a)

王,以百姓推立之一人主之,限以年數,新舊相代,西語曰伯勒西敦(president,譯即為首者之稱)。如今之合衆部 (United States) 是也。慕維廉 (1856:凡例)

ここでは欧米諸国における三種の政体について解説が見られるが、それぞれの政体の元首の性格と名称について割注が付されている。割注がそれを付された語を語彙化するために果たす役割については沈国威 (2010) に詳しい。

そして、著者ミュアヘッドにしてみればやはりこれらの語は音訳でなければならなかった。少なくとも彼の認識にあっては、中国の「皇帝」と emperor、「王」と king は似ているものの本質的には異なるものであったと考えるべきである。¹⁹⁾ 対照的に、同じ来華宣教師による著作であっても、ブリッジマンの『聯邦志略』ではアメリカの事情を中国に引きつけて理解させる傾向が顕著である。例えば以下。

(21)英王有諭云教旨胥定於一,毋許自異致啟爭端,有違者當以罪論。不只其理自有指歸而晰義者不免各抒己見,譬猶中土疏經傳者朱陸互有異同也。裨治文 (1860:上卷開國原始)

(22)如聯邦之北界,地氣則寒,每年降雪,有多至五六月者,比於中華北京及葉爾羌城,四十餘度外之奉天伊犁等處是也。裨治文 (1860:上卷天時地氣)

ブリッジマンとの比較で見た場合、ミュアヘッドがイギリスと中国との差異を差異のまま示そうとする傾向にあったことがうかがえる。

「訳即～」 「訳言～」 「即～」 などという語に続けて中国語で最も近似する語を与えるという形式は、他の文献にも頻出する。

(23)原加爾達額 (Cartago) 國係非尼西亞 (Phoenicia) 國人於洪水後一千四百八十二年 (即周厲王十年也) 遷赴亞非里加 (Africa) 州之美的德拉虐 (Mediterranean) 即中海地也海濱所建之國。²⁰⁾ 瑪吉士 (1847:卷三)

(24)有明萬曆年間,英人請於君后,欲開新地。君后可之,因稱所據之地曰費爾治尼亞 (Virginia), 譯言貞女地。裨治文 (1861:上卷開國原始)

(25)岌朴敦 (Cape Town)

亦作加不。『萬國圖』作岌當。『地理問答』作開伯盾,譯即角市。『近史』作担士担岬,即大浪山 (Cabo Tormentoso)。²¹⁾ 杜宗預 (1904:卷四非洲南土諸國城池所在)

19) あるいは、フランスのような「蛮夷」の元首に「皇帝」などという中国の天子の称号を用いることはできないという中国人側の論理も働いた可能性がある。庄永钦、周清海 (2010) 参照。

20) 本来であれば「即中海地也」の部分は割注としてあるべきところであるが本文に混ざっている。

21) 現代では喜望峰 (Cape of Good Hope) であるがポルトガル人が最初にここに到達したときは「嵐の岬」

新しい意識語だけではなく音訳語も(23)~(25)のような形で従来の文体の中への融合が図られたのである。

また、ミューヘッドは同時に英語と中国語との語法の違いにも注意を喚起している。例えば以下。

(26)一、西人称名毎以爵地書法,爵先於地,如丟克阿非伯京恒 (Duke of Buckingham) 是也。
丟克 (Duke) 爵,伯京恒 (Buckingham) 地,阿非 (of) 字訳即屬也。

慕維廉 (1856:凡例)

英語ではDuke of Buckinghamというところを、中国語では順序が逆になることに対する注記である。ここでも「阿非 (of)」について「訳即～」の形で中国語の「属」に相当する成分であることが注記されている。

1.4. 報刊雑誌類

1.4.1. 主要な報刊・雑誌

19世紀中国に現れた新しいメディアとして報刊が挙げられる。新聞雑誌のような漢文の定期刊行物はまず来華外国人によって創刊されたものであった。最初期のものでミルン (W. Milne) 編『察世俗毎月統記伝』(1815-1821)、ギュッツラフ等編『東西洋考毎月統記伝』(1833-1838、中断あり)が挙げられる。アヘン戦争以後はボール編『華番和合通書』(1843-60)、メドハースト等編『遐邇貫珍』(1853-56)、マガウアン編『中外新報』(1854-60)、ミューヘッド等編『六合叢談』(1857-58)、アレン編『教会新報』(1868-1874) および『万国公報』(1874-1883, 1889-1907)、フライヤー編『格致彙編』(1876-1892)、ウィリアムソン編『中西聞見録』(1872-1875) などさまざまなものが出ている。宣教師によらない報刊にはメイジャー (E. Major) 『申報』(1872年創刊)がある。

中国人による報刊には王韜主編『循環日報』(1874年創刊)、鄭其照主編『広報』(1880年創刊)などがある。

1.4.2. 音訳語形の通時的変遷

報刊雑誌類に現れた音訳語の特徴として、長期にわたって雑誌が刊行される中で語形が変化していく現象が挙げられる。したがって報刊雑誌類に現れた音訳語形を追っていくことで音訳語の通時的な変遷を跡づけることが可能である。ここでは『遐邇貫珍』を例に音訳語の変化を見てみたい。『遐邇貫珍』には「近日雜報」という欄があって国内外の時事ニュースを掲載し

(Cabo Tormentoso) と呼ばれていた。

ていた。刊行初期はその量が多くなかったものの、停刊直前には紙面の半数以上を占めるようになる。はじめ国外ニュースが多かったが後に上海の他の新聞や京報を転載して国内ニュースも載せるようになっていた。国内ニュースでは太平天国、国外ニュースではクリミア戦争に関する報道が多い。²²⁾

一般的に、当時の中国においてリアルタイムな（といっても一ヶ月ほどのタイムラグはあるが）海外情報はこうした報刊の国際面からしか得ることはできなかった。その中から海外情報に関する記事をいくつか見ると以下。

(27)五月二十日,有峨羅斯 (Russia) 國鐵砲五十門師船一隻…終至黑竜江東北,伊屬地堪察加 (Kamchatska) 及北亞墨利加 (America) 等處巡閱 (第1号/1853)

(28)有人云俄國有二枝桅船,由墨兒奔 (Melbourne) 前赴加爾吉答 (Calcutta),為英兵所獲 (第14号/1854)

(29)相傳瑞典 (Sweden) 及俄土的里亞 (Austria) 二國,不久與英佛二國合謀協攻俄國 (第15号/1854)

本編ではこの「近日雜報」からオーストラリアを表す語をとりあげたい。『遐邇貫珍』刊行初期においてオーストラリア (Australia) の音訳語の第一字目は「亜」を用いるものが主流であった。

(30)亞士低里亞 (Australia) 地, 因近時探出金礦, 眾民多謁探金, 致各牧場内工作稀少, 新西蘭 (New Zealand) 之地俱然 (第6号/1854)

(31)本年自正月至六月, 計由港赴新舊處兩金山船隻, 亞士低里亞 (Australia) 計船二十四隻, 三佛蘭息士哥 (San Francisco) 計船二十七隻 (第13号/1854)

ところが第18号からは「澳」を第一字目とする語形が現れ、「亜」系の語形を駆逐してしまうのである。第18号以降、「亜」系の表記は姿を消す。

(32)十月十六日有英船名曰啓明星者, 由澳大利 (Australia) 美盤 (Melbourne) 即新金山揚帆抵港。是船於六月十二日由英國里未不 (Liverpool) 開行, 駛向砵非立 (Port Philips)。(第18号/1855)

(33)本年英六月十二日, 即唐四月二十八日, 澳大利亞 (Australia) 威多里亞 (Victoria) 省總督與創例堂諸大人議定, 添立新例十四條。(第27号/1855)

22) それ以外にも時折欧米の歴史地理を専門に紹介する記事が発表されていた。例えば第22号 (1855年) にはジャンヌ・ダルクの伝記「佛郎西國烈女若晏記略」が見える。

この変化の要因は別に検討する必要があるだろうが、現在考えられるのは例えばフランスの音訳語が「佛郎西」から「法蘭西」へ変化した要因となった音訳語基礎音系の変化である。²³⁾ おそらく Australia の頭音節 [ɔ] に対して「亜」よりも「澳」が適する方言が『遐邇貫珍』の音訳語基礎方言となったのであろう。試みに「亜」「澳」の主要方言での読音は以下。(声調略)²⁴⁾

表 3

	亜	澳
北京	ia	au
蘇州	id (文) io (白)	æ
広州	a	ou

17世紀以降におけるオーストラリアの音訳語形を調査した王敏東（1992）によれば「澳」系表記の初出は『瀛環志略』（1848）であることから、その権威が「澳」系表記を確定させた可能性もあろう。²⁶⁾ ただ、「澳」系表記が『遐邇貫珍』において1855年の第18号から現れている要因については目下明らかにしがたく、今後の研究に俟つ。記事の来源の変化、中国人筆述担当者の交代などが考えられるがいずれも推測の域を出ない。

1.5. 域外遊記類

1.5.1. 主要な域外遊記

域外遊記類は海外に出た中国人の旅行記、視察記、日記の類である。これには謝清高『海録』（1828）、郭連城『西游筆略』（1863）、斌椿『乗槎筆記』（1869）、志剛『初使泰西記』（1877）、張德彝『航海述奇』（1880）、郭嵩燾『使西紀程』（1891）、劉錫鴻『英軺私記』（1891）、黎庶昌『西洋雜誌』（1900）などが主要なものとして挙げられるだろう。単著の遊記以外にも曾紀澤『曾惠敏公日記』（1893）、許景澄『許文肅公日記』（1918）のごとく日記の形で洋行時期の記録が残っているものもある。

本稿ではさらに中国国内の租界の様子を描いたものも範囲に含める。その中には葛元煦『滬游雜記』（1876）、王韜『瀛壖雜誌』（1875）が挙げられよう。

23) これを「基礎音系シフト」という。詳細は千葉（2010:71-84）参照。

24) 北京大学中国语言文学系语言学教研室（2003:14, 191）より作成。

25) 書中に「澳」はないため音韻地位の同じ「奥」の字音を記載している。

26) 「澳」系表記に日本語からの影響はないと見てよい。1850年代まではごく少数の例外を除けば日本語から翻訳語が流入することのない時代であり、かつ当時の日本語ではオーストラリアに対し旧称ニューホラント（New Holland）に基づく音訳語が行われていたようである。

1.5.2. 文言詩と音訳語の導入

遊記の常として、感興を伴えばそこで詩詞が詠まれることになる。それらは本文に織り込まれて異境の地のイメージをかきたて作者の心境を表現する。域外遊記類にあってもその手法は踏襲された。例えば早い時期のものとして『東西洋考毎月統記傳』に掲載された『倫敦十詠』なる詩を見られたい。その第一首である。

(34)海遙西北極	海遙か西北の極	
有國號英崙	國有りて英崙 (England) と號す	
地冷宜親火	地は冷にして火に親しむに宜しく	
樓高可摘星	樓は高くして星を摘む可し	
意誠尊禮拜	意は誠 禮拜を尊び	
心好尚持經	心は好く 經を持するを尚ぶ	
獨恨佛啣嘶	獨り佛啣嘶 (France) を恨み	
干戈不暫停	干戈暫くは停まず	黃時鑑 (1996: 1833年12月)

ここには総題にみえる「倫敦 (London)」の他に「英崙 (England)」と「佛啣嘶 (France)」という当時見慣れない二つの地名が読み込まれている。また中国国内にある租界の風景として孔断鑠『海上竹枝詞』の句を見よう。

(35)先聲不數佛郎機	先聲 佛郎機 (France) を数えず	
吉利英雄力漸疲	吉利の英雄 力漸く疲る	
海上一偶羅部島	海上の一偶 羅部島	
富強今欲看花旗	富強 今 花旗を看んと欲す	顧炳权編著 (2001:480)
(36)修軀廣額細鬚眉	修軀 廣額 細鬚眉	
譯教東來茂厥詞	教を譯して東來し厥の詞を茂くす	
拍手逢人通姓字	手を拍ち人に逢ひ 姓字を通ず	
慕維廉與麥都思	慕維廉 (Muirhead) と麥都思 (Medhurst)	顧炳权編著 (2001:480)

(35)ではフランスあるいはヨーロッパ全体を指す明代からの名称「佛郎機」が見える。また承句の「吉利」は「英吉利」との掛詞であろう。結句の「花旗」は星条旗から名付けられたアメリカの異称である。(36)では来華宣教師ミュアヘッドとメドハーストの漢名が詠みこまれている。

さらに郭連城『西游筆略』(1863)中の詩も見たい。湖北のカトリック信徒であった郭連城

は1859年にローマを訪れ、その年のクリスマスを当地で迎えた。その時の詩である。

⑶7早起聽鐘到夕陽	早に起き 鐘を聞き 夕陽に到る	
君民都進誦經堂	君民都な進む 誦經堂	
風琴韻裡歌聲遠	風琴の韻裡 歌聲遠く	
晝燭光中祭禮長	晝燭の光中 祭禮長し	
不少兒童談白冷	少なからずの兒童 <u>白冷</u> (Beth Lechem) を談じ	
並無人士夢黃梁	並て人士の黃梁を夢みる無し	
遙憐故國歧途輩	遙に憐れむ 故國歧途の輩の	
未識聖嬰誕馬房	未だ聖嬰の馬房に誕ずるを識らざるを	郭連城 (2003:74)

ここではバツレヘムという地名が目を引く。「誦經堂（礼拝堂）」「風琴（オルガン）」といった意訳語とともに、イエスが馬小屋で生まれた故事を描く最終句も注目されてよい。またサンピエトロ大聖堂を拝観したときの詩に曰く、

⑶8愷想宗徒發浩歌	愷に想はん 宗徒 浩歌を發し	
成仁之處水盈科	成仁の處 水 科に盈つとは	
若非航海來相訪	若し航海して相訪うに非ざれば	
誰信奇踪羅瑪多	誰か信ぜん 奇踪の羅瑪 (Rome) に多きを	郭連城 (2003:80)

音訳語はローマが詠みこまれている。奇跡に当たることばにはこの時代「聖跡（蹟）」を用いることが多いが、ここでは平仄の関係からか「奇踪」が用いられている。²⁷⁾

文言詩という伝統的な文芸ジャンルに海外固有名詞の音訳語が浸透していくという現象は、20世紀初頭において旧文体へ大胆に新語をとり入れていく梁啓超の手法に通じるものであるといえよう。

また文言詩で詠まれた海外の情景を中国の故事に引きつけて表現する傾向から何らかの文化的志向を認めようとする見解もあるが、文言詩の制約とターミノロジーの中ではそのようにしか表現しようがなかったという方が妥当であるように思われる。そうした制約を打破することが20世紀の新文体には要請されたのであり、新文体というものの意義の一つであったのである。

27) 宗教用語「奇跡」の語誌については千葉（2009a）参照。

2. 日中間の音訳語交流

本節では、19世紀から20世紀初頭の漢字音訳語が日本語との間に意識語と同様な交流の回路を有していたことを示したい。以下、日本語への流入と日本語からの導入の例を挙げる。

2.1. 漢字音訳語の導入 — 『洋語音訳荃』から

村田文夫『洋語音訳荃』（1871）に関してはすでに松井（1982）が触れているが、1870年代に早くもこのような音訳語辞典が出版されていることは注目に値しよう。陳力衛（2005）にも指摘される通り、1870年代の日本人は中国と日本で使われる漢字語の差異に気付いている。『洋語音訳荃』もこのような流れの中に位置づけられよう。

そして舶載された西洋文献において漢字表記される音訳語は必ずしも日本語の慣用による読みではなく中国語を基礎音として表記されるものであるから、辞書にあたって検索する必要が生じるのである。以下、『洋語音訳荃』の内容を検討しよう。

村田は日本人が日本漢字音に基づいて漢字音訳語を創造することに批判的である。

(39)或ハ白面ノ洋學生ニ音學ハ末技ナリトテ洋語ニ杜撰^{フザン}ノ音ヲ附テ誦スルコト、猶文盲生ガ妄音ヲ以テ漢籍を素讀スルト同様ニテ、動モスレハ其妄音ニ譯ヲ施シテ人ヲ迷惑スルニ至ル。豈^{カッテシタイ}孟浪無稽ノ甚シキナラスヤ。或ハ今ノ唐音ハ邦俗ノ耳聞ニ馴ズトテ、漢音ヲ取テ譯充スルモノアレトモ、原音既ニ正シキヲ失シ、且充ツル所ノ漢音モ亦當ラザレバ、弊上ニ弊ヲ生シ、音ニ實ヲ失スルノミナラズ譯語ニ於テ又一層^{ヲラスギル}ノ繁冗ヲ増ス。是ヲ以テ譯書益出テテ名稱益煩ナリ。 村田（1870:凡例）

同時に、村田は日本でも漢字音訳語は中国から伝わったものが沿用されていることを指摘する。そしてそれを整理して提示することが『洋語音訳荃』の編纂目的の一つなのである。

(40)蓋音譯ハ漢字ヲ以テ洋音ニ充填シタルモノナレバ、今ノ唐音ヲ能ク諳ランズレバ、何ノ勞モナク譯字ヲ充ツベシト雖トモ、從來漢土ノ譯例^{コレマデ}ヲ沿習スル既ニ久シクシテ、邦人ノ耳目ニ馴レタレハ、努メテ其切實ナルモノヲ採拾^{ヨクアタル トリモチヒ}シ、讀者ヲシテ紛雜ニ失セシムラナカルベシ。 村田（1870:凡例）

『洋語音訳荃』凡例によれば『瀛環志略』を主として『海国図志』『英吉利紀略』『地球説略』『聯邦志略』『万国公法』『地理全志』『英国志』から音訳語を採取している。「邦人私撰ノ譯語ヲ収拾セズ」と謳っているので、凡例の言を信じるならば上記西学書からのみ音訳語を採集し

たことになる。本来ならば検証を記すべき所であるが紙幅の関係上原資料との対照結果は別稿に譲りたい。

ところで『洋語音訳荃』は三種類の利用法が考えられる。

- i. 西学書を読む時に会った漢字音訳語の読みや意味を検索。『洋語音訳荃』には簡単な語釈も付いているので簡易な辞典としての機能もある。
- ii. 著述する際に音訳語を漢字で記すための語形を検索。
- iii. 新しい漢字音訳語を創造するために用いるべき漢字を検索。

そして『洋語音訳荃』はこれらの要求を満たすための検索機能が充実している。まず本編は音訳語の日本語読みによるイロハ順の配列である。本編の前には音訳漢字の画数順索引がついていて、その字が音訳語としてどのような読みを持つかが分かる。例えば二画「八」には「パ、バ、プ」とあるので本編の「ハ」を引けば「八」で始まる音訳語を探することができる。

本編を見ると、イロハ順配列の下に「地名」「人名」「雑称」の項目があり、それぞれの見出し語の下に異表記が列挙してある。一つの名称に対して同等に有力な表記があって別の見出し語となっているときは、その語の最初のカナ文字が四角囲みで記される。例えば「カ」の項目には「奥廬 ガウル」がある。その下には「高廬、奥禄、牙里亜」などの異表記が続く。そして語釈には「フランスの旧号」。その下に「フ」とあるので「フ」の項目に飛ぶ。すると「佛蘭西 フランス」という見出しを見つけることができる。そしてここには「ゴ」という記号があって相互に参照できるようになっている。以上のように音訳語の検索には非常に便利である。²⁸⁾

『洋語音訳荃』は地名の音訳と意識の別について明白な弁別意識を有している。「義訳」に出るものは▲を附して音訳語と区別することからもそれは窺われよう。例えば以下。（見出し地名のルビは省略）

- (41) 奥地利 奥地ルリヤ、奥斯的里亞、阿士得黎亞、阿士氏拉、歐塞特里、歐色特里阿、阿士得釐亞▲東國、雙鷹國○國名 村田（1870:37a-37b）
- (42) 米利堅 美利堅、彌利堅、咩里千^{マツ}、米利哥▲花旗、合衆國、合省國、聯邦國、兼攝邦國、亞墨理駕合衆國、育奈士迭○國名（後略） 村田（1870:44b）

(42)の▲以下には「亞墨理駕」という America の音訳語が含まれたり United States の音訳語である「育奈士迭」が含まれていたりするが、少なくとも村田にあっては意識語と判断されたのであろう。『洋語音訳荃』は原資料が語彙化のために与えた割注中の意識語をも拾っているため、それらも『洋語音訳荃』では他の音訳語形と同等の扱いを受けている。

28) ただし「ゴ」の項目を引いても「ガウル」と表記されている「奥廬」には辿り着けない。

『洋語音訳荃』が日本における洋学関連文献の執筆や読解に利用されていたとすれば、そこに記載された漢字音訳語を日本語に定着させる上で間違いなく重要な役割を果たしたといえるだろう。『洋語音訳荃』がどの程度利用されたかは今後の研究に俟つが、日本において中国から舶載された西学書から音訳語を抜き出してまとめる必要が感じられていたことには注意すべきだと思われる。

なお漢字表記される音訳語を収集した資料には他にも青木輔清『音画両引 大全漢語字彙』(1875序)がある。

2.2. 漢字音訳語の輸出 — 『世界歴史問答』から

日清戦争後、日中間での翻訳語の流れは逆転し日本は翻訳語の発信源となった。意識語に関してみれば、この基盤をなしたのは1880年代までに日本ではほぼ完了した訳語の整備である。中国からの留学生たちは日本語文献を翻訳する際、すでに日本で定着していた翻訳語をそのまま取り入れた。本稿の主題に即していえば、この流れに乗って漢字音訳語をも日本語起源のものから導入しようとしたという点が重要である。この点は従来気づかれずにいたことであるが、ここでは例として富山房『世界歴史問答』を取り上げる。²⁹⁾

『世界歴史問答』は范迪吉総訳述『普通百科全書』の中の一冊(第三編、第七～九冊)である。富山房から出版された同名の書を翻訳したものであり1903年に上海の会文学社から出版された。『普通百科全書』は日本のさまざまな学科の教科書類62種を全訳(一部は抄訳)集成したものであり、ここにいう「普通」とは「普通学」つまり一般教養程度の意味であろう。必ずしも現代的な意味での百科事典ではないが、現在知られている「百科」の名を冠した書物としては中国でおそらく初めてのものである。

『世界歴史問答』は世界史の基礎知識を問答形式で解説したもので約100問から成り、³⁰⁾ その内容上地名人名を初めとする音訳語が豊富に含まれる。そして『世界歴史問答』は日本語由来の音訳語を用いている点で特筆される。

ここでいう「日本語由来の音訳語」とは二種類の意味がある。すなわち以下の(a)(b)である。なお(44)～(47)は順に音訳語形、原書での表記、英語による原綴、掲載箇所。

(a)日本で習慣的に用いられる漢字音訳語の採用

(43)露西亞 魯國之勃興第七七問

(b)日本語の音訳語形から中国語の音訳語形を創造

(44)加勒伊 かれゐ (Calais) 佛蘭西第三八問

(45)加侖哀多 かにうと (Canute) 英倫第二三問

29) この節の内容は千葉(2010:129-140)に基づく。

30) 第八〇問の次が第七一問になっているなど問題番号が混乱しているため、実際には100問はない。

- (46)布羅頻斯 ぶろびんす（Province） 羅馬第七二問
 (47)希里濱 ひりぴん（Philippine） 近世史總論第四問

(a)に関して、日本では(43)「露」「魯」をロシアの音訳に用いることが一般的であるが、中国語でこのような語形は管見の限り19世紀まで存在しない。中国語では音訳語形の一字目は「俄」「峨」など果摂字を用いるのが普通である。『世界歴史問答』の訳者たちは日本語原著の漢字音訳語をそのまま採用していると考えられる。

(b)に関して、まず(44)(45)は原語から直接中国語に音訳したものではありえない。原語の長音節に対しわざわざ二字を当てる語形は中国語にはまず見あたらない。つまり(44)の「勒伊」は日本語「れる」に、(45)の「侂哀」は日本語「にう」に対応しているのであるが、これは日本語の表記に基づいた音訳であると判断されるのである。³¹⁾

また(46)(47)において、日本語では原語の[v]は「び」で、[f]は「ひ」で転写されていることがわかる。それをそのまま中国語に転写しようとした結果が(46)(47)の表記に他ならない。すなわち(46)の「頻」という用字は日本語「びん」に対応し、(47)の「希」は日本語「ひ」に対応していると考えられる。中国語であれば一般的に原語[v][f]に対しては非組字が用いられるものである。

『世界歴史問答』の音訳語は一例に過ぎないが、日清戦争後に日本語から翻訳された文献には日本語を基礎とした音訳語が導入されていることがあったという歴史的事実は重要である。これらは19世紀最末期から20世紀初頭にかけての日中語彙交流のピーク時において意識語とともに中国語へ導入されようとしていたのであった。現在では日本語由来の音訳語は音訳語形の規範化などによってほぼ姿を消し、ごく一部にその痕跡をとどめるのみである。³²⁾ しかしかつて存在した語彙交流の経路を再認識することも近代語彙形成史を確立する上で必要な作業であろう。

3. 結語

以上きわめて雑駁ながら19世紀の西学文献とその音訳語を瞥見した。本稿に挙げた文献は19世紀西学書のごく一部に過ぎない。各文献に見える音訳語の基礎方言や影響関係について研究がまだほとんど手つかずの状態であることが分かるであろう。各種文献間における音訳語の継承関係は意識語のそれと平行するものなのか、それとも独自の関係を有するのか、現行の音訳

31) ただし原書の「う」に当たると思われる箇所が「哀」である理由は不明。あるいは「う」を「え」と見誤ったか。

32) 詳細な論証は別稿によらざるをえないが、地質学でいうカンブリア紀「寒武紀」、コナン・ドイルの一連の推理小説の主人公ホームズ「福爾摩斯」、意識地名「劍橋（Cambridge）」などが候補として考えられる。

語形への定着過程はどのようであったのか、基礎方言として官話ないしは国語が安定した地位を手に入れるのはいつ頃なのかなど、未解決の問題は尽きない。本稿では各種文献の音訳語について見られるいくつかの特徴を指摘したが、それとても今後の研究の深化によっては修正を迫られる可能性を残す。

もちろん本稿において分類された文献と音訳語との関係は截然と区分できるような類のものではない。例えば対訳辞書類に典型的に見られる規範化への志向は史地課本類にも多かれ少なかれ見ることができるし、割注や意識の付加による語彙化の試みは文献の種類を問わず見いだすことができる。本稿では各文献群に見られる最も典型的な現象を取り出したのである。

ところでしばしば「中国語では意識語への志向がみられる」といわれる。たしかに普通名詞においてはその傾向を認めうるであろう。しかし、中国語に時折見られる地名人名の意識からその主張をなすのは難しいように思われる。

たしかに、本稿で指摘したごとく音訳語に割注を与え語義を説明する際に意識語が添えられたケースがあったのは事実である。しかしそれらは意識への指向というよりは、むしろ音訳語を定着させるための語彙化のツールであったと考える方が適切であろう。地名の意識とは、多くの場合音訳地名に付した注釈（地名を構成要素に分解して翻訳借用し「訳言～也」と解説する形式）に現れることが多い。またそうした意識地名は多くの場合中国人による発想であることが分かっている。³³⁾ 実際、地名に付された注釈や意識地名が現代に定着した例は存在するがその数は極めて少ない。³⁴⁾

そして音訳語にも意識語と同等な日中間の語彙交流があったという点は強調されてよい。先述したように多様な背景を持つ音訳語は、意識語と同様に日本語との語彙交流関係を有していた。そして日本製音訳語（つまり日本で創造された表記および日本語を基礎音系として創造された表記）も意識語と同様に中国への導入が試みられていたという事実は、事態をより複雑なものとしているように見える。この錯綜した関係を解きほぐすことが、漢字文化圏内の交流を視野に入れた音訳語研究における今後の主要課題の一つといえるだろう。

付記：本稿は平成22年度文部科学省科学研究費補助金（若手B）「19世紀中国における翻訳語の研究」（課題番号70386564）の研究成果の一部である。

〈参考文献〉

千葉謙悟（2006）「畢華珍伝稿」『或問』11:25-40

千葉謙悟（2009a）「訳語「奇蹟」と日中語彙交流」『或問』16:19-32

千葉謙悟（2009b）「“真の”英語を求めて —19世紀中国におけるピジンと英語教科書」内田慶市・沈国威編著『言語接触とピジン —19世紀の東アジア』東京:白帝社 pp.99-120

33) 千葉（2010:143-157）参照

34) 代表的なものは「牛津」（Oxford）、「劍橋」（Cambridge）、「太子港」（Port-au-Prince）などであろう。

- 千葉謙悟（2010）『中国語における東西言語文化交流 —近代翻訳語の創造と伝播』東京:三省堂
- 陳力衛（2005）『『博物新編』の日本における受容形態について —新概念への対応を中心に—』『日本近代語研究』4:199-217
- 遠藤光暁・竹越孝主編（2010）『清代民国時期漢語研究文献目録（稿）』牙山:中韓翻訳文献研究所
- 松井利彦（1982）『明治初期における訳書読解辞書の源流』『広島女子大学文学部紀要』17:69-80
- 宮田和子（2010）『英華字典の総合的研究 —19世紀を中心に』東京:白帝社
- 村田文夫（1874）『洋語音訳荃』
- 塩山正純・石崎博志・千葉謙悟（2010）『泰西資料』遠藤光暁・竹越孝主編『清代民国時期漢語研究文献目録（稿）』牙山:中韓翻訳文献研究所 pp.159-214
- 高田時雄（2009）『清末の英語学 —鄭其照とその著作—』『東方学』117:1-19
- 内田慶市（2002）『近代における東西言語文化接触の研究』吹田:関西大学出版部
- 内田慶市（2010）『文化交渉学と言語接触 中国言語学における周縁からのアプローチ』吹田:関西大学出版部
- 王敏東（1992）『外国地名の漢字表記をめぐって —「オーストラリア」を中心に—』『待兼山論叢』26:17-37
- 北京大学中国语言文学系语言学教研室（2003）『汉语方音字汇』北京:语文出版社。
- 裨治文（1860）『聯邦志略』
- 陳寶楚等（1860）『英話註解』
- 陳獨秀（1916）『西文譯音私議』《新青年》2-4:399-404
- 杜宗預（1904）『瀛寰譯音異名記』
- 范迪吉（1904）『普通百科全書』上海:會文學社
- 顾炳权编著（2001）『上海历代竹枝词』上海书店出版社
- 郭连城（2003）『西游笔略』上海书店出版社
- 何崧齡等編（1924）『標準漢譯外國人名地名表』上海:商務印書館
- 黃時鑑（1996）『東西洋考每月統記傳』上海古籍出版社
- 羅伯聃（1843）『華英通用雜話』
- 瑪吉士（1847）『新釋地理備考』
- 慕維廉（1856）『大英國志』上海:墨海書館
- 沈国威（2010）『近代中日词汇交流研究 汉字新词的创制、容受与共享』北京:中华书局
- 張士瀛（1899）『地球韻言』
- 庄永钦、周清海（2010）『翻译的政治：“皇”、“王”之论争』《或问》18:85-126
- Aubazac（1902）『法粵字典』Hongkong:Imprimerie de la Société des Missions Etrangères.
- Doolittle（1872）『英華萃林韻府』Foochow:Rozario Marcel & Co.
- Fryer（1890）“Scientific terminology: present discrepancies and means of securing uniformity.” *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press. pp.531-549
- Smith（1870）*A Vocabulary of Proper Names*.

